

① 《特集》 市民活動、25時

⑩ 《うおろ君の気にな～るゼミナール》 「シビックテック」って？

⑪ 《ヴォロ's トピック》

NPO法人の解散のポイント

村上 義弘 (NPO会計支援センター アドバイザー)

⑫ 《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》 「先生にお任せ」から自己決定へ 親の会がよりどころになった

中田 智恵海 (ひょうごセルフヘルプ支援センター 代表)

⑬ 《熊本地震・豪雨災害 八代・熊本発 ～現地から伝える「被災地の今」》 多様なコミュニティで地域を支える

宮原 美智子

(一般財団法人くまもと未来創造基金 伴走支援ファシリテーター)

⑭ 《V時評》

1.日常を大切にすること 日常に埋没しないこと
——本誌『ヴォロ』への思い

2.対話こそが、やはり大事

⑮ 《NPOのためのほっこり法律相談》

不当寄付勧誘防止法で何が変わるか

樽本 哲 (弁護士、一般社団法人全国レガシーギフト協会 共同代表)

⑯ 《現場は語る～コーディネート現場から》

企業と市民活動が出会い連携・協働へ

——「オープンフォーラム」からの「出口企画」づくり

谷垣 哲也 (社会福祉法人大阪ボランティア協会 シニアフェロー)

⑰ 《ヴォロ's トピック》

2023年度 市民活動関係の全国集会・大会予定

⑱ 《U35のSocial Good》

クラフトビール「ASOBI」ほか

⑳ 《この人に》

青木 理さん (ジャーナリスト)

㉑ 《アゴラ／シネマ／ライブラリー》

みんなの図書室ほんむすび／「二十歳の息子」／ 書籍紹介

㉒ 《晴れ時々ボランティア》

相原 真樹さん (くしろ元町青年団 事務局長)



じぶんの町を良くするしくみ

赤い羽根共同募金

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。

例えば……



地域で、子育てのお手伝いをしたり、
悩んでいるお母さん、お父さんの
相談にのる活動や、



障がいのある人が、まちで幸せに暮らせ
るお手伝いをする活動や、



地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者
に、栄養の整った食事を届ける活動や、



地域に住むみんなが「安心・安全」に
暮らすための活動や、

地域のいろいろな活動のために役立てられます。

- 今年度は前年度に引き続き、中央共同募金会の全国共通助成テーマである「つながりを
たやさない社会づくり～あなたは一人じゃない～」に重点を置き、つながることをあきらめ
ず、新型コロナウイルス防止策を講じながら工夫して行っている活動や、悩み葛藤しながら活動し
ている仲間たちの交流を図るなど、withコロナ、ポストコロナに向けた社会づくりへの支
援など先進的な事業を「重点助成テーマ」として福祉活動の支援を行ってまいります。
- 国内で大きな災害が発生した時は、共同募金は都道府県域を超えて、被災地で被災した人
たちを助ける活動の支援も行います。
- 寄付金には、税の特典があります。会社など法人の寄付金は、全額損金算入できます。個
人の寄付金は、所得税の所得控除または税額控除、住民税の税額控除の対象になります。



じぶんの町を良くするしくみ。

赤い羽根おおさか

www.akaihane-osaka.or.jp/

募金の使いみちはすべて、ホームページに掲載されています。

特集

市民活動、

25時

社会課題解決や社会的価値創造に取り組むのは、
多くの人が起きて活動する時間帯とは限らない。
今日も深夜に活動する市民がいる。
ようこそ、25時の市民活動へ。



(5 ページ) 自立生活
夢宙センター＝提供



(8 ページ) こどもソーシャル
ワークセンター＝提供



(4 ページ) かわさき犬・猫愛護
ボランティア「猫部」＝提供

【特集チーム】

神野 武美、筒井 のり子、永井 美佳、
細川 貴代、百瀬 真友美

でんでん虫の会の25時



最初の電話がかかってきたのは夕方6時頃だった。でんでん虫の会の事務所の着信が転送される、専用のスマートフォン。同会の吉富文子さんは、自宅ですぐそばに置いていたスマホをとり、電話を受けた。

かけてきた70代女性のFさんは、家賃が払えず住む場所がなく、前日から自家用車で寝泊まりしていた。夫のMさんと飼い猫が一緒だったが、認知症などを患うMさんがいなくなったため警察に相談したという。その際、住むところがない窮状を訴えて、でんでん虫の会に電話するようアドバイスされた。

吉富さんは、Fさんがいる場所と車のナンバーを聞き、待っているよう伝えた。次に、日ごろから連携している市民団体に連絡。団体の担当者は、Mさんが見つかったときに車に戻るのではなく入院

してもらおう方がいいのではという意見だった。入院につながりそうな夜間当番医を担当者が探すと言ってくれて、いったん話を終えた。その後、当番医のあたりがつき、担当者は食料を持ってFさんの待つ車へ急いだ。



警察から、「Mさんを発見した」という電話が吉富さんに入った。Fさんといった担当者が警察に行き、Mさんに付き添って当番医の病院に向かい、無事入院できた。

Fさんにはシェルターを紹介し寝泊まりしてもらうことが考えられたが、猫がいるため車を離れようとしな。そこで、別のスタッフが猫を保護してくれる市民団体を探して保護先を確保。翌日になつて、Fさんもシェルターに落ち着いたそう。

吉富さんは一晩中、連絡係を務めた。「Mさんは、入院できればいいかもしれませんね。入院先を

担当者が探しますね」「今、食べ物を持った担当者が向かっていますよ」「警察がMさんを見つけました」……。情報を受け取り整理してFさんや連携先に伝える役割は、刻々と変わる状況の中で重要だ。

いつでも支え合うために

でんでん虫の会は、「ひとりじゃないよ」を合い言葉に、ひとり暮らしの高齢者などが支え合うことを目指す会だ。中心となる交流活動の「おしゃべり会」は昼間だが、「支え合う」ために24時間電話を受けられる体制をとっている。会員のなかでもおしゃべり会の運営やニーズ調整などに関わるメンバーを「スタッフ」と呼び、事務所にしかかってくる電話を転送して受けるスマホをスタッフの誰かが持つ。

吉富さんは、このスマホを持つ時間が長い。3年前、生命保険会社を定年退職後に「何かボランティアを始めたい」と探してい

て、知人からでんでん虫の会を紹介された。会社で営業担当者の教育にあたっていたことを話すと、電話対応をしてみないかと誘われた。深夜の電話は多くないというが、それでも月数回ほど、寝ていて電話に起こされることがある。

多いのは警察などの緊急電話だそう。会員の誰かが遠くまで歩いて行き帰れなくなったり、深酔いして道で寝たりして、保護した警察から連絡が来る。会員が入院した病院から、容体急変の電話がかかってくることもある。でんでん虫の会の名前の由来は「なんでん・かんでん、いつでん・どこでん、だれでん・かれでん」（なんでも・かんでも、いつでも・どこでも、だれでも・かれでも）だ。「いつでん・どこでんを体現しないと」と吉富さんは笑う。

身元保証人になり深夜に呼び出し

取材時期、転送を受けるスマホを持っていたのは代表の吉松裕藏

さん。吉松さんが「深夜の電話」で思い出すのは、ある男性の賃貸アパート更新時に身元保証人になり、男性が夜中に酒に酔って暴れるたび、家主や近所の人から呼ばれたことだ。

身元保証人になるときは、事務所の電話番号だけでなく、個人の電話番号を併記することが多いため、連絡は個人の電話に直接かかってくる。そのたび駆けつけて、話をして落ち着いてもらった。そんなことを繰り返した後、男性は酒をやめ、今では父親の墓参りに一緒に行くなど家族代わりの付き合いになっていく。

会員などが入院する時に身元保証人になると、逝去の連絡を深夜に受けることもある。危篤状態のときは、いつ車で向かうことになるか分からない。満月や新月の夜に起こりがちなので、月の満ち欠けを記した月齢カレンダーをチェックして飲酒を控えたりする。

支援者もひとりじゃない

この年末年始は、事務局長の永田貴子さんがスマホを持ってい

た。その時も、深夜1時頃に着信があった。「騒音や悪臭で寝られない、という方からでした。でんでん虫の会のことは、スマホで検索して知ったそうです。1時間くらい話を聞くうち、落ち着かれました。それから、体調の問題があったため通院をお勧めしました」。永田さんは、病院の開く日に約束を取り付けて、通院に付き添ったという。

深夜に限らず、切迫した様子の人から電話があると、以前は「すぐに駆けつけなくちゃ」と焦った。今は、落ち着くまで1時間でも2時間でも話を聞きさえすれば、どうするか一緒に考えられるようになるかと分かっているの、あたふたすることはない。

『これで解決』というような対応ができなくても、連絡をいつでも取れて一緒に考えてくれる先ができたと思ってもらえた時点で、私も『この人は電話を切っても大丈夫』と信じて待てるようになる。そこまで最低1時間かかります。24時間駆けつけられるわけじゃないし、相談された問題は自分一人で抱えず、スタッフや会員、他の

市民団体などと助け合って取り組みます。会の合い言葉の「ひとりじゃないよ」は、支援者にも向けられていると永田さんは言う。「支援者も、ひとりじゃない。それが、活動を続けるうえで一番大事なことだと思っています」

*文中のケースは、実際にあった出来事に基づいて再構成しており、事実を一部変更しています。また、イニシャルは実際の名前のもではありません。



おしゃべり会 (2023年2月)

提供=でんでん虫の会

NPO法人でんでん虫の会

熊本市中央区九品寺3丁目3-26

2010年発足。独居高齢者などの孤立を防ぎ社会参加や交流機会をつくるため、熊本市内4カ所で週1回ずつ「おしゃべり会」を開催。約500人の会員などに対して家族代わりになる伴走型支援に、10人ほどのボランティアスタッフを中心に取り組んでいる。

マンスリーサポーター・
単発寄付など募集中

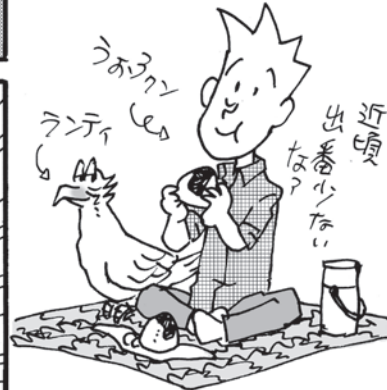


吉富文子さん(左から3人目)、吉松裕藏さん(中央)、永田貴子さん(右から2人目)。2023年2月、学生インターンの皆さんと 提供=でんでん虫の会

うお3君の 気にな〜る ゼミナール

Vol.
129

「シビックテック」って？



まんが ■ ラッキー植松



シビックテックとは、C i v i c (市民) と T e c h (技術) をかけあわせた造語。市民が主体となつてさまざまな地域の課題をIT関連の技術を使って解決し、住みやすい社会を作る活動のことを指す。テクノロジーを活用する市民が中心となつて、身近なニーズを把握し課題解決をはかることで、これまでとは違ったアプローチをとることが可能となる。技術にたけた市民が単独で活動するだけでは複雑で多様な課題の解決ができないため、行政や企業、地域のさまざまな関係者と共創・協働を進めることが多い。

国内では、筆者らが2013年5月に石川県で創設した「Code for Kanazawa」(翌年より一般社団法人コード・フォー・カナザワ)が日本初のシビックテックコミュニティとされる。同年9月には市内のどの地域でも、いつのごみを捨てればいいのか一目で分かるアプリ「5374.jp」を、自治体データを活用して開発。ソースコードをオープンにして、全国130以上の都市で利用された。

それから国内にたくさんコミュニティが誕生し、現在は北海道から沖縄まで多くの地域でシビックテックコミュニティが活動。地域の特性にあった活動を続けて、市民発のテクノロジー活用サービスが、子育て、防災、環境、交通など幅広い分野で開発されている。

一般社団法人コード・フォー・カナザワ

代表理事 福島健一郎

ヴォロ・バインダー、 いかがでしょうか？

ヴォロ2年分(12冊)を
挟み込めるバインダー
(1冊500円+送料350円)です。

お問い合わせはヴォロ編集部/office@osakavol.orgまで





上／ビール作りに携わる人たちと
右／ビール缶には天橋立、丹後ちりめ
ん、棚田など地域を象徴するモチーフ
がデザインされている

提供（全て）ローカルフラッグ



これからの社会を担う35歳以下の社会起業家。素直な思いと自由な発想は、どんな商品・サービスを生んだのか。若き起業家たちの「物語」には、きっとあなたにも伝わる「熱さ」があります。

U35の Social Good

第37回

クラフトビール「ASOBI」ほか

株式会社ローカルフラッグ

代表取締役 濱田 祐太さん

京都府与謝郡与謝野町字男山 119-5 電話 050-5373-5587

設立：2019年7月 スタッフ数：7人

民間のまちづくり会社として、中間支援やコンサルティングだけでなく地域の旗振り役として自ら動き、事業を作り上げ、経済成長・雇用確保・人材育成などの好循環を生みだすことで、持続可能な地域づくりを目指している。地元産の「与謝野ホップ」を使用したビール「ASOBI」の販売や移住定住の相談窓口、企業の採用伴走といった地域プロデュースを手がけている。

地域の旗振り役を増やしていきたい

地元がなくなるかもしれない

10代半ばまでさえない学生時代を送っていたと語る、濱田祐太さん。スポーツもできないし、勉強もできない。自分に自信がなかったそうだ。転機は高校生のとき。友達に誘われて、地元与謝野町の祭りなどに参加したことがあった。勉強もスポーツもできない自分でも、外に一步踏み出すことで誰かの役に立てることに気づいた。自信がつき、いろいろなことにチャレンジしてみようと思うようになった。

その一つのきっかけは、地元の大人が放ったひとことだ。「こんな町、どうせ廃れていくだけだから」。ちょうどその頃「2040年までに全国の市町村のおよそ半数である896の自治体が消滅する」と発表された通称「増田レポート」(注)を読んだこともあり、このままでは地元がなくなってしまうのではと危機感を覚えた。その解決を他人任せにせず、自分たちで取り組んでいかなければと思いを強くした。

「地域を変えるには政治家にならない」と思ったが

大学では、公共政策や地方自治を学んだ。「地域を変えるには政治家にな

らないといけない」と思い、議員インターンシップを経験。しかし、「議員になっても変えられることはあまりないのでは」と感じた。若くて優秀な地方議員は増えていくが、口をそろえて言うのは「首長になるか議会の多数派を形成するかしないと物事を変えることはできない」。政治の世界は若さが強みになるとは限らないと思うようになった。

インターンシップでは、議員の他にも市民団体のスタッフや社会起業家と話す機会に恵まれた。地域の政策や制度は政治家がゼロから全て作っているわけではない。各分野の現場から「もっとこうしたらいいのでは」と提案してくる人々の存在を知った。実際に制度ができて、役所だけがその担い手になるのではなく、民間と連携しながら進めていく。民間の立場から地域を変えていく可能性の高さを実感し、地域課題の解決をテーマに起業を決意した。

つなぐだけではなく、働く場を作る

起業の当初のねらいは「若い人と地域をつなぎ、地域からイノベーションを起こす中間支援組織だった」と濱田

上／収穫されたホップ
下／海と緑に囲まれた与謝野町

ホップ生産の農作業をサポートする「ホップレンジャー」の収穫体験。
町外からもたくさんの人が集まる



さん。その後いろいろな事業を調べる中で感じたのは「地域に若い人をつなげることは大事。しかし、若い人が働きたいと思える会社が多いかと考えると、そうではない。つなぐだけではなく、若い人たちが働く場を自ら作っていかないといけない」ということだった。

(注) 日本創成会議・人口減少問題検討分科会の報告「成長を続ける21世紀のために」「ストップ少子化・地方元気戦略」を指す。座長を増田寛也氏（元総務大臣、日本郵政株式会社社長）が務めたことから増田レポートと呼ばれる。

た。中間支援機能だけだったら、スタッフ数人程度の組織にしかない。ものを作って利益を上げることができれば、多くの若い人が与謝野で働きたいと思える仕事が生まれるのではないかと考えた。15年から与謝野町では、地域のブランド戦略の一環としてホップが生産されるようになったため、ビールの販売を思い立った。仲間たちとさまざまなビールを飲み比べ、出てきた味のコンセプトは「飲み疲れないビール」。まだ自社のブルワリーがなく、静岡の工場に製造を依頼している。

20年に与謝野ホップ使用ビール「ASOBI」を販売した。遊び心を持って飲んでほしいという思いと地元の誇りである日本三景・天橋立の内海である「阿蘇海」が名前の由来だ。インターネットとイベントでの出店販売がメインだが、ナチュラルローソンや京阪電車の駅中ショップなどでも販売されている。与謝野町のふるさと納税の返礼品の一つにもなっている。年間の出荷量は約10万本である。

まちのシンボルとしてのブルワリー

23年7月には、京都丹後鉄道与謝野

町駅前にブルワリーが完成する。ビールを作るためだけでなく、与謝野町のシンボルとなるような場所にしたいと考えている。ローカル線の何もない駅前にブルワリーができることで、駅の乗降客数が増えるかもしれない。「コミュニティには、集まれる場所が必要だと思うんです。ブルワリーを建て、ビールを飲むところを作ることでも人が集まってくる。与謝野町には地域や個人的なつながりを超えて、気軽に集まれる場所はあまりないので」と語る。

地域の旗振り役に

濱田さん一人でスタートした会社も今では正社員3人となった。「地域で主体的に何か新しいことをしていくことが大事だと考えています。地域にいかにプレーヤーを増やしていくか。自分たちが頑張りつつも、新しいことを始めたい人たちを後押しすることを大切にしていきたい」と話す。

今後取り組みたいことのひとつが事業継承である。地元では、後継者がおらず廃業する企業が出てきている。その事業を継承する経営者の人材を募集するんです。若い人が面白いと思って働

ける場所はどこなところなのかと考えたときに、ビジョンや思い、自分でありたいことができるオーナーシップ、一定の給料、そして、そのまち自体が好きなのかどうか、これがそろったら地域に移住すると思うんですよ。そんな仕事を増やしていくのが僕たちの会社の目的。自分たちがリスクを取って、チャレンジする中で地域に波及効果を生み出す。地域の旗振り役となっていける仲間を増やしたいと思っています」

編集委員 久保友美

濱田 祐太さん

1996年生まれ。京都府与謝野町出身。地元の活性化を志し、大学では地方議員の事務所ではインターンシップに参加。その経験から政治ではなくビジネスで地域課題を解決したいと考え、大学2年生から地元でインターン受け入れ事業や都市部人材と地域企業の兼業マッチング「ふるさと兼業」などに取り組む。2019年、株式会社ローカルフラッグを設立。



が務めたことから増田レポート

「みんなの図書室ほんむすび」

阪 堺電車松虫駅から西に徒歩約7分、聖天山公園に面する改装した長屋にある「ほんむすび」。本を貸し出す人がお金を払い、交代で店番をしながら運営する「シェア型図書室」だ。入場は無料で、ふらっと立ち寄ったり、ゆっくり本を読んだり自由に過ごせる。初回貸し出し利用登録料の500円を支払うと、本棚の本を2週間無料で借りられる。また、月額2500円で図書室に自分の本棚を持ち、おすすめの本を並べて貸し出せる。この「一箱本棚オーナー」になると店番をしながら本や作品の販売、ドリンクスタンドの出店ができ、月2時間までワークショップや読書会などのイベントで貸し切れることもできる。医療・福祉従事者が店番をする、心身の悩みを気軽に話せる「居場所の相談所」が開かれることもある。

ほんむすびは、建築士の起田陽子さんの設計事務所 Rehabilitation Design Lab. に併設されたスペースだ。理学療法士でもある起田さんは、かつて病院で働くなかで、来院前に気軽に相談したり人とながつたりすることが必要と感じた。暮らしの場をよりよくしたいと志した建築の仕事と合わせて、ほんむすびを立ち上げるに至った。

見知らぬ人同士が一冊の本をきっかけに巡り合い、つながりが生まれることもある。女子高校生が本を返却しに来た時、ちょうど本棚オーナーの60代男性が店番をしていて、その本に関して会話が始まり、話が弾んだという。

用事がなくてもただいられる、町の居場所。そのきっかけや「言い訳」として、本が生かされている。「つながりを『処方』する(注)場所を、みんなと作っていきたい」と、起田さんは語ってくれた。

編集委員 阿部太極、村岡正司、百瀬真友美

(注) 孤独など患者の課題に対して、薬ではなく地域でのつながりを処方することを「社会的処方」といい、イギリスなどで取り組みが進んでいる。



右／一箱本棚オーナーお勧めの本が並ぶ本棚中／本の感想を書き込める感想カードなど、来館者の交流を促す工夫も
左／窓の外には聖天山公園の風景が広がる

みんなの図書室 ほんむすび
大阪市阿倍野区松虫通3丁目3-11
mail:info@rehadelab.com
営業日時:不定期
(<https://hommusubi.shop/>に掲載)



**貧困と排除に立ち向かう
アクションリサーチ**
韓国・日本・台湾・香港の経験
を研究につなぐ

全 泓奎 著
明石書店、2022年12月
3080円(税込)

大 阪公立大学都市科学防災研究センター教授の全泓奎氏は、学生時代に韓国ソウル市内のスラム地域に居住し、都市整備で強制立ち退きを迫られた住民のために闘う学生グループ「ピンファル(貧民活動)」のリーダーとして活動した。その中で困窮する青年と出会い、一緒に焼き芋を売ることで生活を立て直せることを学んだという。このことが、当事者からの聞き取りでその生活史を知り、問題解決の糸口を探る実践と結びついた研究手法「アクションリサーチ」に取り組む契機となった。

著者は1999年に留学生として来日。東京でホームレ

ス支援のための共同炊事や夜回りに参加し、「公園内の住まいの小屋は仲間同士が協力して建てた」といった当事者の自己決定による生活改善の重要性を知った。また、困窮や差別にさらされてきた地域は社会的なサービスやネットワークに接する「生の機会」に乏しく、「地域効果」の悪循環で貧困者が集中していく「社会的不利地域」となる実態を調査・研究した。

本書では、野宿生活経験者が雑誌ビッグイシューを販売することで収入面だけでなく「生の機会」を得られることや、差別に苦しめられてきた大阪市内の三つの地域が、コミュニティビジネスによる生

活改善を図ろうと協同でコミュニティ開発会社を設立したことなども取り上げている。

また、外国にルーツを持つ子どもたちが母国の文化に触れあう機会を保障する「エスニック文化権」の意味と、ソウルの貧困者集中地域のチョッパン(狭小で劣悪な無認可の簡易宿泊所)、台湾の廉価宿所居住者や原住民、香港の狭小住宅など東アジア地域のアクションリサーチも紹介。著者は、研究者から現場に入る人材を育成する教育方法の開発と、それを支える仕組みの必要性を強く訴えている。

編集委員 神野 武美

2 月11日から、私の劇場公開3作品目となるドキュメンタリー『二十歳の息子』がポレポレ東中野にて公開された。児童養護施設等の子どもたちの自立支援団体でスタッフとして働くゲイの男性が、要支援者である二十歳の青年と養子縁組し、生活を始める物語だ。

本作は極端に説明を排し、物語的起承転結からも逸脱した少し不親切な作りとなった。それはひとえに、目の前の今を感じてほしいという思いからだ。映画は、小説などの表現と違い、人の内面を映し出すことができない。だからこそ、ナレーションやインタビュといった手法で内面を説明するのではなく、映画ならではの表現を追求したいと思った。そも

そも、なぜ主人公の男性が二十歳の青年と養子縁組をしたのか、という問いへの答えも、映画の中で明確には明かされない。実は映画を作っている最中に、私なりの答えを提示したつもりだったのだが、いざ公開してみると、なかなかそれが伝わりにくいのだと知った。私自身、映画は観客のものと考えているため、どのように解釈をしても構わないと思っている。ただ、人が何かを選択する際に、明確な答えがある人は稀だとも思っている。意識的なものもあれば、無意識的なものもある。だからこそ、私たちは他者を想像することが大切なのだと思う。そして決して理解することなどできない他者を、それでも分かるうとする行為こそ、私たち

©JyaJya Films



監督：島田隆一 撮影：林賢二、前田大和 編集：遠山慎二
製作：JyaJya Films 配給：プライトハウス・フィルム
2022年 | 日本 | 86分 | ドキュメンタリー

今月の作品 「二十歳の息子」

●今月の館主

しまだりゅういち
島田 隆一

2012年、監督作『ドコモイケナイ』で日本映画監督協会新人賞受賞。監督最新作は『春を告げる町』(20年公開)。プロデュース作品に『桜の樹の下』『帆花』がある。現在、日本映画大学准教授。「ドキュメンタリー映画って、観るよりも作る方が数十倍面白いよ!」といつも思います。



イラスト：杉浦 健

私の市民活動 Library (第55回)



プロテストってなに? 世界を変えたさまざまな社会運動

アリス&エミリー・ハワース=ブース 著
青幻舎、2021年9月
2200円(税込)

PROTEST = 異議申し立て。抗議」と辞書にはある。本書は、史上初の労働者ストライキ(紀元前1170年のエジプト)、中世のドイツ農民戦争、ナチスへの抵抗運動、天安門事件、そして2018年の学校ストライキなどの比較的名なできごとから、本書を開かなければ知り得なかったような事例まで、市民発のさまざまな抗議活動数十例が時系列で登場する。「座り込み」や「ストライキ」は、今も抗議行動の主要手段として盛んだが、古代エジプト時代、ピラミッド造りの労働者たちが食糧の少なさに抗議して行動に出て以

来、悠久の歴史があったのだ。各章の最後には、見開きページで手段別の抗議行動事例が紹介される。それらは「言葉」「アート」「団結する」など身近なアピール手段から、「植物を育てる」「何もしない」「スポーツ」など、ちょっと考えただけでは想像できないような行動までが網羅され興味津々だ。著者はロンドンに暮らす、イラストレーターとライター

がけた」としつつも「ハッピーエンドを迎えられなかったものもある。多くの場合、警察や国家による暴力がつきもの。ときにリスクをとともなうものなのだと、よく理解しておくこと。自分の国の法律をよく調べて、友人か家族と一緒に」と、行動者の身の安全を気遣うことも忘れない。ネオンカラーの表紙、235×193mm・168ページのハードカバーというボリュームな造本・装丁、豊富なイラストとわかりやすい文章によるページ構成も本書のチャームポイントだ。

編集委員 村岡 正司